令和３年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

Ⅰ　スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
Ⅱ　マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
Ⅲ　スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
Ⅳ　日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
Ⅴ　スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

道府県・政令市名【北九州市】

学校名【北九州市立足立中学校】

１　実践テーマ	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ（複数選択可）
２　実施対象者 （学 年・人 数）	・１年生　９５名 ・２年生　１２５名 ・３年生　１０３名
３　展開の形式	（１）学校における活動 ①（○）教科名（　総合的な学習　） ②（○）行事名（オリ・パラ講演会） ③ その他（　　） （２）地域における活動 ① イベント名（　　） ② その他　（　　）
４　目　標 （ねらい）	・リオパラリンピック車いすテニス日本代表二條実穂氏の話を聞き、車椅子の使用体験やボッチャの体験などをすることにより、パラリンピック競技に興味を持たせ、東京大会に向けた機運醸成を図る。 ・車椅子を使って生活する苦労や工夫を知り、障害のある方たちと共生する社会について考え、誰もが気持ちよく生きるために必要なことを実践していこうとする心情を養う。
５　取組内容	「リオパラリンピック車いすテニス日本代表二條実穂氏の講演と交流」 ・事前の７月２日（金）６校時、事前学習としてプリントの読み合わせを行った。「二條氏の簡単な紹介」「車いすテニスのルール説明」「パラリンピアンたちに秘められた力」「東京 2020 パラリンピックの紹介」「ボッチャの説明」など。 ・７月６日（火）に講演会実施。新型コロナウイルス対策のため、３校時に２年生、４校時に３年生、５・６校時に１年生と３回に分けて行った。２・３年生は昨年度、講演と車椅子体験を行ったので、今回は「東京パラリンピックの見どころ」の講演と「ボッチャ体験」を行った。「東京パラリンピックの見どころ」の講演では、二條氏が東京都製作のガイドブックを２・３年生全員分取り寄せて、それを見せながら説明してくれた。「ボッチャ体験」では、ガイドブックとＤＶＤで説明した後、１チーム５～６人ずつに分かれて、体験を行った。２年生の会では、職員もボッチャの

	要領がよくわからなかったため、生徒たちの指導補助がうまくいかず、１～２回ずつしかできなかったが、３年生の会では、職員が一人ずつ対戦場所に着いてアドバイスをして、各チーム４～５回試合ができてボッチャのやり方を理解することができた。 ・１年生の会では、二條氏が障がい者となった経緯とその後の意識改革と努力の様子とリオパラリンピックでの活躍の講演会と、車椅子の体験会を行った。 ・講演会では、プレゼンによって車いすテニス選手になった経緯や周囲の人に支えられて精神的に成長した話をしてくれた。当時世界ランキング１位の上地結衣選手とのペアで世界選手権３位になったダブルスの試合のＤＶＤを視聴し、リオパラリンピックダブルス４位になるまでの苦労、チームとして助け合うことの大切さ、障がいを乗り越え活躍していくための努力について教えられた。プレッシャーに押しつぶされそうな時に、プロ野球のファイターズ栗山監督の「プレッシャーを楽しんで来てください」という言葉でポジティブに考えるようになった話などが生徒の印象に残った。 ・車椅子体験会では、全生徒が交代で競技用車椅子に乗車してコーンをターンして戻る体験と、ソフトテニス部の代表生徒による車いすテニス体験を行った。車椅子走行の大変さやUターンする難しさを学ぶことができた。二條氏と車椅子に乗っていない教師とのテニスのデモンストレーションは大変盛り上がり、トップアスリートの車椅子さばきと強烈なスマッシュに大歓声がおきた。 ・二條氏への質問タイムでは、興味を持った子たちが積極的な質問を出していた。 ・放課後、テニスコートでソフトテニス部の生徒たちにテニスについてアドバイスやトレーニング方法を熱心に教えてくださった。生徒たちは、自分のタオルやラケットケースなどにサインをしてもらい、感動していた。今でも大切に持ち歩いている。
６　主な成果	・パラリンピックの公式なガイドブックが配布され、パラスポーツの１つであるボッチャを体験することで、東京パラリンピックを身近に感じることができた。 ・二條氏の生き様や絶対にあきらめない精神力、リオパラリンピックの見どころなど大変わかりやすい講話だった。「自分と誰かを比べない。比べるのは過去の自分」「無理とは絶対に言わない」など、将来の展望・夢などに刺激を与えてくれた。 ・競技用車椅子と車いすテニスの体験を通して、車椅子操作や競

	技の難しさを実感するとともに、障がいがありながらも巧みに車椅子を操作して、プレイする二條氏の凄さを実感することができた。車椅子を使う立場になって考え、障がいのある人に対する見方が変わり、障がいをもった人たちと共生する豊かな社会をつくろうとする心情を養うことができた。 ・部活動生徒は、障がいがありながら努力を重ねてトップアスリートとして世界で活躍した二條氏への尊敬の念を持ち、その心情の強さを感じ、生き方について考え、生徒自身の目標へとつなげることができた。 ・嫌な出来事でもすべてのことには意味があり、目標を立てて前向きに向かっていくことが大切で、壁にぶつかっても「不可能」を「可能」に変えていく姿勢をもつ気持ちが芽生えた。 ・パラリンピックや車いすテニスに興味がわき、東京 2020 パラリンピックを応援する気持ちをもつ生徒が増えた。
７　実践において工夫した点（事業の特色）	・実際に生徒が体験できる場面や選手の動きを見る場面を取り入れ、ハンディキャップのある人の大変さを感じるとともに、障がいがありながらもアスリートとして活躍した選手の凄さを実感できるように場の展開を工夫した。 ・講演では、世界選手権３位、リオパラリンピック４位までの努力の様子やペアと一丸となって取り組む姿勢や苦労話で、生徒たちにスポーツを通して助け合う心や努力の大切さ、障がいに負けない心の強さを実感してもらうように配慮した。 ・滅多に乗ることのない競技用車椅子を参加生徒全員に体験させることができた。 ・則松中学校の江口校長が参加校の実践マニュアルを作成してくださり、競技用車椅子とボッチャセットの受け取りや運搬をスムーズに行うことができた。
８　主な課題等	・一校単独での講演会は予算的にも難しいため、今年度も数校合同で計画して、規定の予算内でトップアスリートの講演会が実施できた。 ・講師を招聘する際のアスリートなどへの連絡や計画などを代表校が窓口になって進めてくれたため、スムーズな取組ができた。
９　来年度以降の実施予定	・平成 29 年度より、オリ・パラ推進校に指定していただき、取組を重ねるごとに、オリンピック・パラリンピックへの生徒の興味・関心を高めることができ、以下の重点目標を達成するために取り組んできた。 ①スポーツ及びオリ・パラの意義や歴史の理解 ②海外からの客人をもてなすボランティア精神の育成 ③インクルーシブな社会の構築 ④日本及び世界の文化・伝統の理解 ⑤スポーツへの興味・関心の向上 ⑥ＳＤＧｓの視点に立った、国際理解・環境教育の実践 ・東京 2020 大会の価値ある足跡を残していくために、今後も可能な限りの取組を推進していきたいと考えている。